

コロナ禍の中のシアトル滞在

人文学部教授 衣 畑 智 秀

在外研究の機会を得て、2020年3月から2021年2月まで、米国ワシントン州シアトルに滞在しました。私たち家族が日本を出発し、シアトルに到着したのが2020年2月27日でした。当時、コロナウイルスの感染者はすでに日本で確認されていて、東京では数十人の感染者が出ていましたが、福岡はまだ2人の感染者が確認されたところでした。アメリカの状況はさらに日本に比べても感染者が稀で、1月27日に1人の感染者がワシントン州で確認されただけでした。我々は出国できるのかという不安もありましたが、数ヶ月に渡って、研究員の申請、パスポート・ビザの取得、海外保険の検討・購入、海外口座の手配、子供の学校の手続き、住民票や税金の手続き、家や車の整理・手配など、さまざまな準備をしていたため、その時点でキャンセルするという考えはありませんでした。

実際アメリカに来てみると、マスクをしている人なんて、日本から来た乗客を除けば1人もいませんでした。当時はアジア人がウイルスを持っていると疑われ差別される、ということさえ聞きました。それが、こちらに来た翌々日に、ワシントン州で全米初の死者が確認され、2週間後には全米におけるウイルスの広まりを憂慮して、国家非常事態宣言が出されました。

おそらくこの2週間くらいの中に、生活の劇的な変化があったものと思います。国家非常事態宣言が出された後は、多くの業種で店舗を閉め、店内飲食は禁止され、公園の遊具も使えなくなりました。小学校は、3月10日に長男が初登校しましたが、3月11日にはコロナウイルスのために閉鎖されました。結局9月からはリモート授業になり、長男が小学校に通えたのはこの1日だけでした。

しかし、このような劇的な生活の変化があったにもかかわらず、この時期我々は生活を立ち上げるた

めにB&Bに滞在しながら奔走し、気づいた時にはすでにさまざまな制約があったため、この劇的な変化がウイルスによるものか、住空間の移動によるものか今ひとつピンと来ませんでした。つまり、シアトルでの自由で良い時間を知らないため、いろいろな制約が加わっても、それは元々そういう場所での生活なのかもしれない、といったような感覚で、特に不便を感じていたわけではなかったのです。

スーパーに行って、買い物をして、マグナスン・パークを人と距離を取りながら散歩して、それがアメリカの普通の生活だと言えば言えるわけで、特に食料に不自由しているわけでもなかったのです。そういう日常をただ、淡々と送っている状況でした。

我々が住んでいたのは、ラドフォード・コートというワシントン大学が経営しているアパート群でした。ワシントン大学から車で10分ほどの距離にあり、南側にはウィングミアという高級住宅街が広がり、北側はサッカー場や野球場、テニスコートもある自然豊かなマグナスン・パークに面し、東側はレーニア山も望めるワシントン湖まで徒歩10分という、自然に恵まれた治安の良い場所でした（BLMの政治集



書斎から見えるラドフォード・コートの風景

会や抗議デモはありましたが)。また、大学が経営しているため、住民の多くがワシントン大学の関係者のようでした。実際そこで知り合った日本人、韓国人、台湾人の家族は、ワシントン大学の大学院生やポスドクの研究者でした。我々が住み始めた3、4月の間は大学の建物はほぼ閉鎖され、ラボもしまっていたので、ほとんどの人が在宅ワークをしているようでした。私が所属したワシントン大学の言語学科も3月には全ての事務や授業をオンラインにしていたので、一日中家族とともに過ごしました。ラボに所属している人たちは、5月ごろから人数制限を設けながらもラボが開くようになっていったので、大学や研究所へ出て行くようになりましたが、言語学科については滞在の最後まで対面の授業や研究会は行われなかったため、全ての期間をこのラドフォード・コートで過ごすことになりました。

我が家には小学生の長男、幼稚園に通い始めていた次男、まだ1歳になったばかりの三男がおり、この3人の相手をしながら自宅で研究するのは骨が折れました。着いた頃は、ほとんどの時間を生活準備や子供の相手に使い、研究時間を確保できなかったため、子供が寝ている5時に起床し、起きてくるまでの2時間、朝食を済ませた後の2時間、子供を公園に連れていき遊ばせた後の2時間を、研究の時間に使えるようにしました。8月まではそのようにして1日6時間を研究に確保できたのですが、9月に入ると長男のリモート授業が始まり、その世話をしながら仕事をするという、これまで経験したことがないスタイルでの作業となりました(妻は三男をあやしながら次男のリモート幼稚園につき合うという芸当をやったのけました)。しかし、1日6時間という、福岡にいるときに比べると非常に短い労働時間にもかかわらず、その全てを研究に費やすことができたため、研究は思った以上に捗りました。

5月9日には、言語学科で、受け入れの荻原俊幸先生がホストをしている Semantics Roundtable という意味論の研究会で、宮古伊良部方言の情報構造について発表しました。また、その発表を聞いてくださったネイティブ・アメリカン諸語を研究してるシャロン・ハーガス先生が声をかけてくださり、Field Reports という研究会でそのデータの取り方について6月6日に発表を行いました。9月には日本に帰国

を予定していた研究会がオンラインになったため、係り結びの変遷についてシアトルから発表をしました。12月4日にはシアトルの日本人研究者の会で、医学系の研究者ばかりの中で琉球宮古語の研究について紹介しました。秋学期には、12月17日に同じく Field Reports で、自然談話に注釈を入れる ELAN というアプリについてレクチャーしました。夏休み以降は授業もなく、研究会も少なくなったので、宮古狩俣方言のアスペクトの研究と日本語の疑問文の歴史的研究にも着手し、滞在期間中に論文を執筆することもできました。アスペクトの論文は荻原先生と何度もオンラインでミーティングしていただき、1月28日の Semantics Roundtable で、先生にも聞いてもらうことができました。

このように順調に研究を進めることができたのは、ワシントン大学のアパートだったことも大きかったと思います。アパートで使っていた LAN は、大学のものだったので、図書館の電子資料にそのままストレスなくアクセスできました。また、私自身の使った方言や歴史の資料は FU_Box に入れてアクセスしていましたが、海外のジャーナルに図書館から豊富にアクセスできたので、ほしい論文があれば簡単に手に入れることができました。また、コロナ禍によって図書館が閉まっていたため、HathiTrust Digital Library が緊急に、全米の図書館にあるデジタル化された論文を、ワシントン大学の図書館を通じて使えるようにしてくれ、通常では手に入らないものまでオンラインで見ることができました。これまではパソコンの画面上で論文を読むことにやや抵抗がありましたが、このようなパンデミックの状況の中では紙媒体を集めることがいかに無力かを実感し、pdf を入手しそれに注釈を付けて読む便利さを感じました。

このように研究の方は順調に進みましたが、在外研究のもう1つの大きな目的であった研究者との交流は、全くといって良いほどできませんでした。前述のように受け入れの荻原先生とは、夏休みに時折ミーティングをしていただきましたが、それ以外で個人的に研究について言語学科の研究者や大学院生と話すことは全くありませんでした。発表も4回行い、2つの研究会には出ていましたが、オンライン研究会は発表が終わればそのまま会が終了します。

そこに残って研究について話す、といった、対面では普通に行われる、一見無駄な、しかし貴重な時間は全く失われてしまいます。また、発表者が自分の話に手間取ると、(研究会自体がタイトなスケジュールのため) 意見交換の時間すらなくなることもあります。もちろん、私の方からメールなどでミーティングをお願いすることもできたかもしれませんが、そのような形式的な依頼ではなく、ざっくばらんにアイデアを交換する機会が欲しかったと感じています。

しかし、いくつか幸運な出会いもありました。1つは、Field Reportsに参加していた マーサ・ツツイ・ビリンズさんという方にお会いできたことでした。この方は、ロンドン大学の博士候補生だったのですが、ご主人の仕事の関係でたまたまシアトルに住み、この研究会に参加していました。さらに彼女の専門は奄美方言で私と専門が近く、メールを通じてやりとりをし、その後、家族も含めて仲良くしてもらいました。もう1つは、ラドフォード・コートで若い研究者と家族ぐるみで付き合えたことです。1人は遺伝子科学を専攻されている日本人の方で、3月に九州大学の助教を辞めて、ワシントン大学でポスドクを始めておられました。もう1人は台湾人のポスドクの方で、蛋白質の設計を研究されていました。私の次男が彼らの子供と同じプレスクールのクラスになり、バーベキューをしたり、ブリュワリーに行ったり、テニスをしたりしました。そのような機会に研究の話も聞くことができ、また、彼らの論文が Nature に立て続けに掲載されるなど、大きな刺

激も受けました。彼らには、研究に100%集中できる環境があり、大変羨ましくも感じました。

未曾有のコロナパンデミックの中で、米国滞在は必ずしも期待していたようなものではありませんでしたが、誰もが苦しんだ1年だったと思います。その中では十分な研究の時間をいただき大学関係者の方には深く感謝いたします。



Visiting Scholar Profile: Meet Tomohide Kinuhata

"Hello! I am **Tomohide Kinuhata** (<https://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tkinuhata/>). I work for Fukuoka University in Japan and am currently a visiting scholar of this department (until next February). I earned my PhD through a study on the history of Japanese and am now working on the fieldwork of Miyako-Ryukyuan: Ryukyuan is a sister language of Japanese and spoken in the Ryukyu Islands, which are situated on the southwest of the Japan main islands. I very much enjoy the life in Seattle, taking part in some linguistics meetings* but hope to see you all in the department building during my stay if the restrictions due to COVID-19 are more relaxed!"

*Dr. Kinuhata gave presentations on Ryukyuan at Semantics Roundtable and Field Reports Spring 2020.

言語学科の Newsletter に載っている筆者の紹介

Griffith University (Australia) での在外研究を終えて

筑紫病院 内分泌・糖尿病内科 講師 阿部 一 朗

はじめに

2019年6月から Australia、Queensland 州 Gold Coast の Griffith University で在外研究員として内分泌病理学の研鑽を積んで参りました。在外研究員としての海外派遣、更には1年間の予定を延長し、2021年11月まで研究を続けることをお認め頂いた、朔啓二郎学長、柴田陽三筑紫病院長、小林邦久筑紫病院内分泌・糖尿病内科教授をはじめ、多くの皆様に心から感謝致しております。

まず、この期間が通常の留學生活と大変異なる状況となりましたことについて書かせて頂きたいと思えます。ご存知のように、2020年、COVID-19 感染症が世界中で猛威を振るい、Australia もその影響を強く受けました。言うまでもなく私の研學生活にも大きく影響がありました。日本では行われていないロックダウンも身をもって体験することとなりました。Australia は所謂第1波が強力で、急激な感染者数の増加を認めたことから、ロックダウンに早急に踏み切りました。その間、自宅から出られるのは、必要最小限の生活必需品の買い物、病院の受診、教育機関では唯一閉鎖されなかった幼稚園への送迎の

みで、その規則を守らなければ罰金が科されるという厳しい環境でした。段階的解除後も研究室の閉鎖は続き、特別申請を出さねば研學ができないという状況も経験しました。非常に辛い状況でもありましたが、振り返って考えると、このタイミングでの留學だからこそその経験を多くできたとも思っています。実際ロックダウンで多くの飲食店が閉店しました。観光業も盛んな街でしたので、多くの方が職を失ったのも目の当たりにしました。しかしながら、Australia の人々はあまり悲観的になっていませんでした。私は妻と娘とともに留學致しましたが、娘の幼稚園の友人の父親から、ロックダウンで生活は苦しいけれども、生きてさえいれば必ずよいことがあるはずだから、と笑顔で話されたことはとても印象的でした。この経験は私の今後の人生に大きな影響を与えるに違いありません。そして、師事した Alfred Lam 教授の多大なご厚意もあり、COVID-19 感染症の真っ只中ではありましたが、実りの多い留學生活を送ることができたと考えております。

Griffith University と Gold Coast

さて、私の留學した Griffith University は、上述したように Australia の Queensland 州にあります。実は Griffith University は福岡大学と姉妹校提携しており、COVID-19 感染症が広まるまでは、学部学生間では短期の交換留學が行われていました。研究員 (Visiting Research Fellow) として福岡大学から Griffith University に留學するのは非常に珍しいことであるようで、今回の私の留學が将来の姉妹校関係の発展につながれば嬉しい限りです。Griffith University は大きく4つの campus にわかれ、私の留學した部門 (Cancer Molecular Pathology) は Gold Coast の campus にあります。Gold Coast はその名の通り海に面した街で、Surfers Paradise というサーフィンの聖地が街の真ん



① Alfred Lam 教授と

中にあります。その昔、金がとれたことも名前の由来であります。高層の建物も多くありますが、緑も多い街で、とあるスポットに行けば野生のコアラを見ることが出来ます。Australia は移民が多い国であり、街中でもフレンドリーに接してくれる現地の方が多かったと思います。ワーキングホリデーを利用して英語を学びながら働く日本人も少なくなく、街を走る tram は made in Japan でした。最近第2外国語で日本語を選択する学生も増えてきていると聞いて嬉しかったのも覚えています。私は街の中心部から少し離れた、海まで歩いて10分くらいのところに家を借りていました。campus はやや高台になったところにあり、4つの campus のうちの1つとは思えないほどの敷地の広さで、campus 内の移動で汗だくになることもありました。campus が建て替わったこともあり、なかなか奇麗で、洒落た外観です。医学部棟は敷地内にあり、講義はそこで行われますが、実習などは道を隔てた Gold Coast University Hospital で受けます。私も病理組織を受け取りに定期的に入っておりましたが、ここも奇麗な建物で、tram の駅と直結しており、利便性もよい環境でした。Griffith University は Australia では比較的新しい大学ではありますが、その業績で近年評価が上がっている大学です。教育、研究ともとても力を入れていることを肌で感じましたが、構内にアルコールが飲める bar があったりなど、日本では考えられないところもまた印象的でした。

私の所属していた部門 (Cancer Molecular Pathology) は少数精鋭で、前述した Alfred Lam 教授、講師、Research Fellow が私、私の1年前より東北大学外科学講座から留学してきておられた石田裕嵩先生、我々の部門で大学院を卒業した1名の計3名、大学院生が6名という部門でしたが、まさに筑紫病院と同じように、他の部門との垣根がとても低く、私自身も他の部門の Research Fellow と一緒に研究をしていました。また、私の得意とする molecular biology の部分に関しては、大学院生の指導も行っていました。Alfred Lam 教授は内分泌病理学の第一人者であり、褐色細胞腫をはじめとした内分泌腫瘍に関する WHO のガイドライン作成委員の1人です。それだけでなく、大腸癌や食道癌などの病理学者としても、WHO のガイドライン作成委員として活躍され

ている方です。研究は前述したように他の部門の方とも行っていましたが、肝腎なところは Alfred Lam 教授からの直接の指導を受けることができ、研究以外にも内分泌病理学の基礎から様々な知見を事あるごとに教えて頂きました。医学部生の講義にも何度も参加致しましたが、事前に PDF で講義資料が学生には送られ、講義中は皆自身の PC を開き、その PDF にメモをとりながら聴講するというスタイルであり、当初は驚きました。授業は全て録画されていて、学



② Gold Coast の街並み

生はそれを講義後に見ることもできます。また、多くの学生が講義中でも疑問点があると挙手して質問するというのも印象的でした。

研究

ここからは実際の研究について書きたいと思います。私は以前から内分泌腫瘍の中でも稀とされる褐色細胞腫に関して興味を持ち、筑紫病院勤務中から臨床研究を行っていました。褐色細胞腫は、その他の腫瘍性疾患と同じく、最近の遺伝子解析の進歩でその病態が明らかになりつつあります。他方、この腫瘍は腫瘍径が大きなものが多く、個々の差が大きいことも知られていますが、腫瘍の増大と直接関係する物質は報告されていませんでした。私は多くの腫瘍性疾患における腫瘍の増大、進展に関わる RAS-RAF-MEK 系及び PI3K-AKT-mTOR 系の両者の上流に存在する、VEGF (Vascular Endothelial Growth Factor) に着目し、褐色細胞腫の腫瘍組織、cDNA を用いて、臨床病理学的な所見との関連を検討しまし



③ Griffith University の campus (上：医学部棟、下：学生係)

た。近年、VEGF の中で major な VEGF-A の効果を、VEGF-B や VEGF-C という同じ VEGF family の subtype が修飾することが報告されています。検討の結果、VEGF-A が高発現している腫瘍は腫瘍径が大きくなるだけでなく、VEGF-B や VEGF-C が共に高発現している腫瘍では、その相関がさらに強くなること、その中でも VEGF-A と VEGF-B が共に高発現している腫瘍は腫瘍径が大きいことを見出しました。また別の観点から、MDM2 (Mouth Double Minute 2) の機能に着目しました。腫瘍抑制遺伝子として有名な p53 の変異は主に悪性度と相関します。機序として MDM2 がその一旦を担っていることは既知のことですが、その一方、MDM2 は p53 independent pathway で腫瘍増殖に関連することが示唆されています。今回私が解析した症例では p53 の変異は一例も認められませんでした。MDM2 の発現を一部の腫瘍で認め、その発現は VEGF-A の発現との関連を認めました。これらより、VEGF-A の腫瘍増殖への影響は、MDM2 の p53 independent pathway を介している可能性を初めて明らかにしました。多くの遺伝子異常で病態が明らかになってきた褐色細胞腫ですが、critical に腫瘍増殖に関わる因子を同定できたことは、今後の褐色細胞腫の治療に応用できる可能性は高く、Histology and Histopathology 紙に原著として accept されました。また、これとは別に、Alfred Lam 教授が内分泌病理学について様々なことを事あるごとに教えて下さり、それをヒントに様々な内分泌腫瘍に関する総説執筆にも取り組み、計 3 報の筆頭の総説を、Current Oncology Report 紙、Frontiers in Endocrinology 紙、前述した原著の論文と同じ Histology and Histopathology 紙に投稿し、accept されました。加えて、内分泌病理学の text book の執筆も行い、複数の chapter を無事まとめることができました。Alfred Lam 教授は勿論のこと、一緒に研究生活をともにした皆様には感謝しかありません。

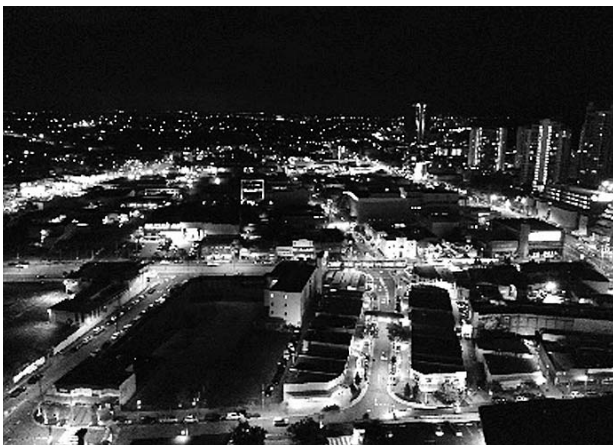
おわりに

私は以前から留学希望がありましたが、40歳になったときに一度あきらめていました。しかしながら、幸運にも今回このような留学生活を送ることができたことに心から感謝しております。将来留学したいと少しでも考えている皆様には、是非あきらめ

ることなくその気持ちを持ち続けて頂ければと思います。私は決して英語が得意だったわけではなく、何の準備もせず現地に参りました。最初は大変でしたが、何とかなるものです。Alfred Lam 教授からは帰国後も時々メールをお送り頂き、遣り取りをしています。いつか共同研究しよう、と仰って下さっているのはとても有難いことです。帰国後もこのような関係が続けることができていることから、留学生活を送ることができたことが素晴らしい経験だったと感じます。また、今回の留学にあたり、前述した私の留学の先輩、同僚である石田裕嵩先生には、lifeline の構築から、大学での様々なことで本当にお世話になりました。そして、今回の留学は、私が学術評議員を務める日本臨床内分泌病理学会の理事長である、笹野公伸東北大学病理学講座教授のご尽力があればこそのものでした。この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。最後にですが、急に決まった留学にも関わらず当然のようについてきてくれた妻、娘には、苦勞をかけたと思います。COVID-19 感染症という全く想定外のことがあったにも関わらず、妻も自身のキャリアアップのため途中から私と同じ Griffith University の公衆衛生学修士大学院に入学し研鑽を積み、娘は現地の幼稚園で英語を懸命に理解しようと頑張り、帰国する頃には英語で communication をとることができるようになり、友人も多くできていました。私だけでなく、二人が充実した時間を過ごしてくれたことはとても有難く、嬉しいことであり、そのことも含め本当に感謝しています。

これから筑紫病院のみならず福岡大学の発展に寄

与できるよう、そして日本、更には世界の内分泌学分野において、様々なことを発信できる Physician-scientist として成長していけるよう、この留学生生活を糧として尽力したいと思います。



④ 自宅からの夜景

